

火 曼 錄

火旻録序

波風和カに四ヨ方モ静なり。枝をならさぬ泰平の
化に生合たるは。幸の大なるならめ。實ゲニやあ
やしの稻筵ニに生ソ立タたる者までと。家ごとニに。千
秋樂を唱ヘ萬歲樂を諷は。偏ヘに寛仁大度。明君
の徳澤。仰べし尊べししかはあれど。治るに
乱残忘ずとかや。政事の端にも不携タツカハラ君の傍カタハラ
にも不召モソフ武士モノたらん者は徒イタツラに空禄ハムを嚙ハムべ
からじ。二六時中。文武の修行稽古。具實事を

切磋琢磨し其餘力には武器の故實に。志を
盡して。時勢を哲サトリ及兵具をサグリ探て。其得失利害
おと穿鑿なし。何事を車胤が螢を集孫康が
雪を積し。勉あれがし。是ぞ本意なるらん。凡
武器故實と云るは。三部。六国史。律令格式。及
諸軍記物語などモロクノ統スベテ正史實録野史雜書に至
までの文中フミウチに見ゑし所。古今を闘トウ戦センの風儀。
盛衰乃人迹。其時變を悟サトし。且ツ兵具の類をシヨウ椒
纂サンして。舊院舊社に存せる所の。古し名将英

士乃。著具弓矢太刀刀槍類。及備器の品。まて
探需し。諸史の表と考合。て正邪を明白に。古
物を耳し。天文の頃おひより。以來の武器に
基て。今當に用べき兵具を。眞實に製する事
に竅然たり。論語に所謂。温故而知新。乃語を
以的實とせり。世には武器の故實を書し。史
も諸家の文車にも推書林が店にも交り。固
先輩の衆にも豪傑博識も乏からざれども。
或物覘に流て本を失。或好古の偏僻あり。亦

⇒不読字写しミス？

恢覘

浮屠氏。巫覡の徒に狂れ。或画製乃輩。好事無
稽の族に侵れたる者。多かめれば杜撰胡亂
の故實にて。説者而已ありて。信仰するに足
ず。故實に志ありてん人は。與得思惟して。邪
路に逃て正路に速ぬべし子として。親の叟
を掲るは。世時の謗も。耻さるに似たれども。
父忠夫一貫は幼穉(稚)より。射御劔槍の事術。及
諸藝道を好て。既其師の所免して篤信たり。
亦此武器故實にも。丹誠にして。能古の事に

も通じ。今於おいてもシツ哲て。兵具の製造も懇チンにて。事
物の正實を大悟せり。其門アソヒに遊ぬる人も。數
多ありしが。僉ミナ半途トにして止ぬ。漸ヤウヤクに建部能
致。遠藤一重の両士。頗スコフル發斂ハツレンを過ヨキツくも。漂タトツて其
志を不屈セツイ竟に其覺悟にも到イタリたり。諄マコトに父門
の顔回レなりと可謂レ。亦歴歳の久シ。門シに入る
も幾イタ人かあれども。更に厚志ジンの人タセ適サカ逅ナリなり
稍ヤ載サイあつく。今茲コンシ乃長瀛シヤウエイに當。伯州苧米城の隊
士。伊藤覺貞。武器故實に。志を歩ハコ運ビて予が許モト

祐方云爰ニ一重
ト有ハ予カ師ノ
思忠先生ナリ

にチナミ儂父モトメにサスカイナミ需しが流石否が、て。其求に應じぬ一日甲冑新調乳繩の叟を。尋問に及しが父の曰。指ナラて倣ナラなど有にあらじと答し。カサネ疊て伊藤曰武器普録末書に（属）附屬せる所。乳繩式掌之卷あり。定て當家にも傳て文庫にワサマリ収たりつらんとイフ言。父其書名すら。夢にだも不知と。いらゑせしマ儘來辰をマツ俟て。伊藤其書を持參たり。予も一覽するにマコト寔小兒戲の論とも謂へしホトコロ素乳繩乃用とせる所ウツカ誥ならじ。取ルに

不足書なれども。伊藤が求に點頭て。父其書
に評註を加ぬ。殆艸稿なりぬるに至て。予以
爲題號すべけん。時に父に是を乞ければ。
父のいへらく。嗚呼がましく。題號すべき程
乃書にはあらされど。書名なくては。紛然た
り。徒に穉に著せしものなれば。其儘名呼と
して。宣なるらんと。言しに。任假に題して。火

旻録とそ云爾

維時

文化四祀丁卯

大野路之助一徳

こうひん(九月)

鴻賓月廿七日

謹識之

在判

火旻録

武器普録式
繩式掌之卷

大野又兵衛一貫愚評

乳繩式掌之卷

一貫曰此式掌ノ式ノ字ハ如何ノ事ニテ
書入タルニヤ式トハ格式律令ト相竝ヌ
ル朝廷(延)ノ作法ニテ今ハ將軍家ニモ節制
アル所ニシテ甲冑ノ乳繩ニ取程ノ事ヲ
爲ナスニ其式アルト云ハ嗚呼ガマシキニヤ
式ト云事ヲ私ニ定制スルモノニハアラ

ザルベシ但小笠原家伊勢家ナドハ足利
將軍ノ代ニハ弓馬諸禮内外ノ作法ヲ勉
ラレタル家柄ニテ分別タリ此義伊勢安
齋先生ノ著述ナル書ニハ所々ニ出タリ
サレバ此家筋ヨリ定ラレシ作法ナラン
ニハ何ノ式ト云事ヲ記レタリトモ難ス
ベキニハ非^ス私ノ書ニ何ノ式ナド、式ノ
字ヲ入ル事ハ心得違ト云モノ也若此書
小笠原家伊勢家ナドヨリ傳來ノ古書ナ

ルヤト熟覽スルニ全クソレ其二ハ非ス如何ニモ
遠藤得心先生ナドガ著述ノ書ト知レタル
下文ニテ見ヘシ都テ此先生ガ書例ニテ
此式ノ字ヲ用ル事武器普録本文及口傳誌
ナト云物ニ所々ニ出タリ其書ヲ得テ可
レレ誤サレバ式ノ字ハ用ニ足サルベシ私家
ヨリ制シタル式作法ヲ普アマネク何者カ用ベキ
ヤ考ベシ

夫乳繩ヲ伺フ事則根元之身堅メ也故ニ當

流ニ用ル所ハ常之式ト異リ先繩之断様ハ
一貫曰此乳繩ト云モノヲ取事ヲ根元ノ
身堅也故ニ當流ニ用ル所ハ常ノ式ト異
トハ何ゾヤ此常式ト對互シタル常式ト
ハ何事ヲ取行式ニ對シテ書タルヤラン
不分明ナリ得心先生ノ巧簡ニテハ其對
互セル差別アルベケレド他ニハ合點ナ
リガタリ徒ニ常式ト而已アリテハ何ノ
事トモ辨ガタシサレバ何が異ナル乎否

乎不審ナリ且武家ノ禮ニハ甲冑ノ乳繩
ヲ定ガ如鎖細ノ事ヨリモ重禮ハ何程モ
アリ嗚呼ガマシク云程ノ事ニハアラス
唯著用ノ寸尺ヲ取窮事而已ニテ右等ノ
ゴトク器匄程ノ事ニハ非但貴人ノ著具
ヲ定事ナレバ其事ハ謹テ相務ベキハ勿
論ノ儀ナリ祝禮ハ其貴家ニ任テ可ナラ
ン己ガ流儀杯トテ私ニ制スルハ名利ヲ
慾者ノ所爲ナリト知ベシ亦當流ニ所用

トハ何ゾヤ故實ニ何流ト云ル流義アル
ベキヤ流義アリテハ天下ノ論ニ非_ズ天下
ノ論ニ出テ正義ニアラサル事ヲ誰カ用
ベキヤ當流トハ井蛙ニテ此書様ニテモ
式ノ字ヲ入タリシ趣モ察セラル、也槍
刀ノ術ナドノ如_キ一已私ノ藝ニハ其先人
ノ所行ヲ學者ヨリシテハ流義ト稱シテ
亦人ニ傳事モ有ベシ故實ニ流義ト云事
ハ會_ハテナキ義ナリ流義アリラハ私ノ臆

説ト云物ニテ一向他分ニハ通ゼザル義
ニテ故實ニアラズ故實ハ誰彼モ能合點
スル事ナラデハ故實トハ言ガタシ稽ベ
シ

紙

今ハ奉書
ニ好トス

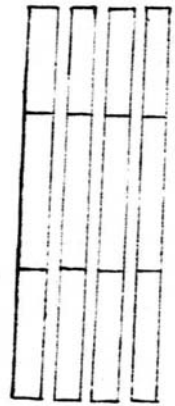
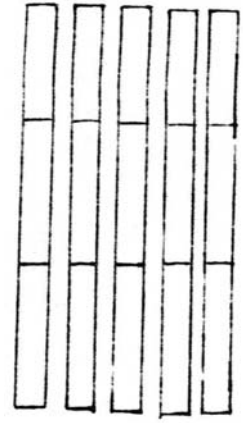
一枚ヲ横ニ二ツニ折リ

一貫曰今ハ奉書トアリテハ合點ナリガ
タシ此今ハノ二字ハ古昔ムカシニハ何ヲ用テ
乳繩ヲ取タルト云事ナケレバ今ハノ二
字虚ナリ古例ヲ正サゞレバ今ハト對ス

ル事ハナキ筈ナリ古書ニ其用タル物知
ガタキ則ハ今ハノ二字ヲ書ニハ及ズ奉
書ヲ好^{ヨシ}トスト書テ可ナリ是等ノ書様物^{モノ}
有^{アリ}氣^ゲニテ惡シ其事アラバ正ク書頭度モ
ノナリ其義ナケレバ不審ナリ

其一方ヲ九ツ宛ニ折テ断之也二九十八之
數ヲ用ユ偕其紙ヲ三枚宛續キ用ル也紙何
枚ニテモ此數也

其圖



一貫曰此數ニ紙ヲ截事モ二九十八ノ數
トヲモ惡ベキニモ非九ハ重陽ノ數ナド
トテ好人モ多キ數ナレバ可用但其書様
圖スル所惡シ紙ハ横ニ折テ九ヅ、ニ斫
モヤハリ横ニ辟事ト見横紙ナレバ紙ノ

勢弱^ヒテ快カラズサリナガラ乳繩ヲ取事
サマデ引張ニモアラザレバ弱テモ濟事
ナレドモ豎ニ截^チテ繼^(繼)立レバ紙ニ力アリ
テ可ナレドモ彼三枚ヅ、ニ繼合^セタレバ
人ニ仍テハ乳繩ノ長不足ニ覘^ム本文ニ順
テ三枚ヅ、續バ太槩^(概)曲尺四尺五寸餘ニ
ナル幅ハ狹豎ハ長サレバ此図ノ盡様泰
アシ、是ハ豎ニ續タル図ノ様ニ見ユル
也都テ圖ヲ出ハ辭計^(辭)ニテハ行届マジク

トテ其形ヲ模スル事ナレハ其恰好大躰
正物ノ紙ニ相似ザレハ其圖ノ用空キガ
ゴトシ續合テ覓ベシ合點行事ナリ右ノ
繼紙ニテ乳繩臍繩等ハ自在ニ取ル、也
手ノ繩ハ居形ニシテ撩テハ人ニ依テハ
短見ルナリ亦片方ヅ、取テハ紙數不足
ナリ龍ノ繩頰ノ繩ノコトキハ其餘端長
ケレハ是ヲ作畧シテ用事ニヤ夫ニテハ
指懸煩シキ事モ出來スベキニヤ亦手ヲ

眞直ニ伸シタル尺ニハ相應セル様ニ見ユ
ル也何様予ガ繩ノ取様下文ニ辨ズル
所ノ趣ヲ以テ合考取捨スベシ

目錄之圖

御乳繩
御前立繩
御後立繩
御臍繩
御手繩
御臍橫繩
御咽繩
御頰繩
以上

三折^ッ二枚重ネノ横目
録也三ニ疊テ右ノ三
宝ニ居ル又日御臍繩
ノ次ニ御咽繩御頰繩
次ニ御手繩凡可書
是ハ大将見玉フ處ノ
目錄也註文者ヨリ此
九ヶ所奉伺之由ヲ告
ルノ爲也

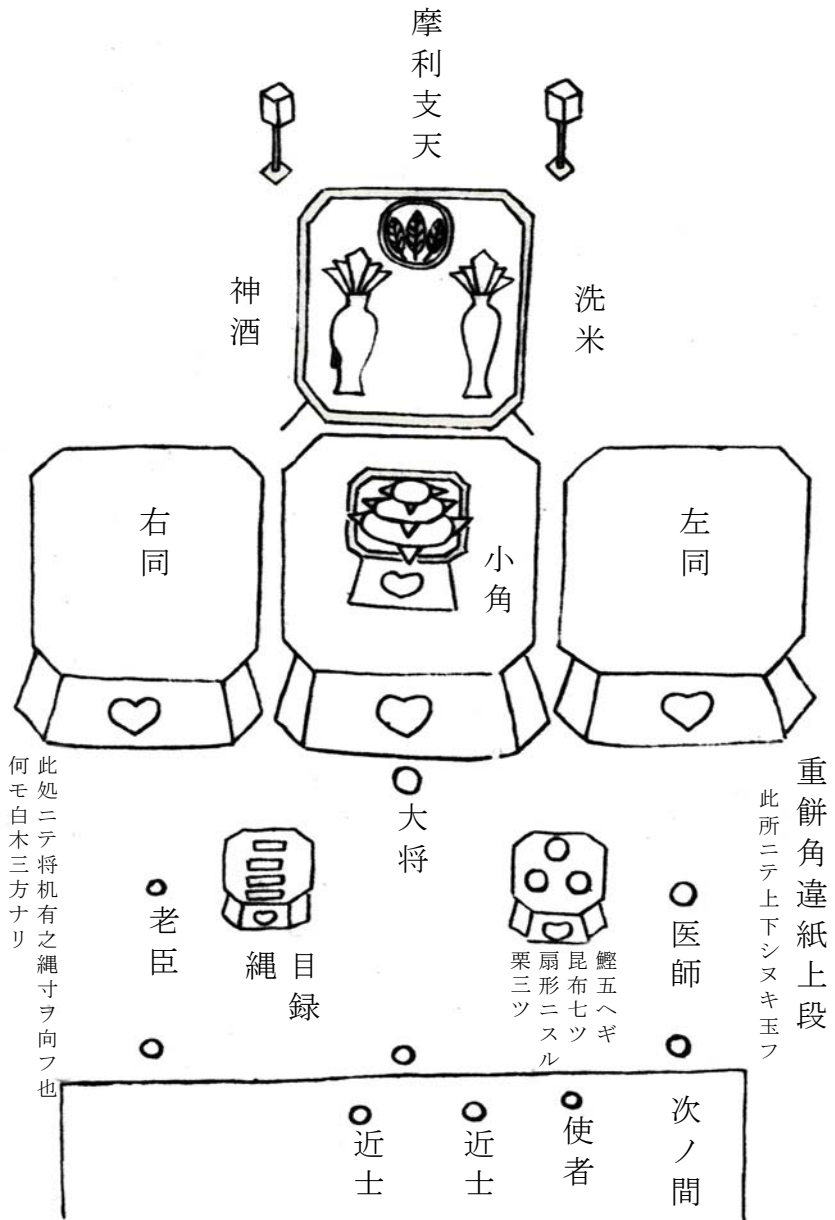
一貫曰目錄ノ認様イカヅニヤ全躰次第
セル所ハ上ヨリ下ニ到事順次トユベシ
然ニ此次第ハ髓繩ノ次ニ唼繩のど頰繩ノテ
个條ヲ記テハ逆ニナルナリサリナガラ
乳繩ヲ以本躰トセル事ナレバ胴ノ繩ヲ
一番トシ臍繩前後ノ豎繩ヲ記別段ニ闕
字ヲシテ頰繩唼繩手繩髓繩ト次第シテ
モ可ナラン歟或たヅヲ新調ノ時ハ頭繩ヲ
取ヘキ事勿論ナリ其時ハ頰繩ヨリ前ニ

記^スベシ或^ハ九數ヲ好^シテ九個條ニ記^{タキ}度トキ
ハ頰繩ヲバ頭繩ノ條ニ書加^ルテモ然^ルベキ
歟強^{アチガチ}箇条ノ數ニ拘^ルニモ有ベカラズ何陽
數ニナラバ然^ルベキニヤ時宜ニ應^ルテ數量
ニ拘ベカラズ又本文乳繩ノ事ヲ式ト定
タル程ノ事ナルニ兜ノ事ヲ記^ルザスハ如
何ニヤ兜新^調謂ノ時ハ此頭繩ハ彼式トヤ
ラン云モノ、外ナルヤ一向乳繩マデヲ
目錄ニ一個條記^ルテ其餘ノ繩ハ別紙ニテ

モ認^ルナラバ聞エサルニ非^ス髓繩マデモ目
録ニ出タルヲ以^テ見ハ頭ノ繩ヲ个^ノ条ニ入
ザルハ不審ナリ元來此乳繩ト云事古昔
ノ趣ハ詳ナラズ今當鎧師ニ命ズル事ア
ルニオヒテハ委細ニアラザレバ叶^ハザル
ノ義ナリサレバ數个條ノ繩ノ論モ入用
ノ事ト知ベシ

席之圖

委ク諸職之作法紙後ニ記之



一貫云是等ノ事ハ元來乳繩ノ役ヲ務_ル役
ノ必_ス司_ルヘキ事ニモアラズ神靈躰等ノ事
ハ祭儀ノ社人祈願僧ナド云者ノ司_ル事ニ
テ強_{アナガチ}武士ノ預ベキ事ニ非サレバ飾附供
物等ハ彼者共ガ指圖ニ任テ可ナラン或
膳部ノ事ハ包丁家ニ附タルモノナレバ
供物等ハ臺_(台)所ニ任テモ濟ベキニヤ或_ハ其
家々ノ毎春甲冑祝儀等アル事ナレバ是
ニ任テモ然ベケン歟免角自宜ニ順ベシ

亦無據其事カゲテ其祝儀調ガタキ時ハ
心得モ有バ撩計テモ可ナリ最初ヨリ物
知顔ニテ神像ノ事ヲ始トシ供物等ノ事
マデモ我獨欸テ吉日良辰マデモ己ガ作
舞トセル、猥ニ事ヲ慾ト云モノニテ惡
ベキノ甚キナリ統テ夫々ノ其人アリテ
其部ヲ分別和同シテ取行事コソ本意ナ
ラメ蒐時ニコソ其人々ノ能得テモ掲事
專一ノ義ナリ克々考ヘシ是等ノ祝儀ニ

モ限^ラス甲冑著初産屋ノ引目等ノ類ニ至
テ鎖細ノ事マデモ己^レ獨^リ引受テ物知顔セ
ル故實者軍家者射家者流ノ輩モ小カラ
ズ是正路ヲ學^マザルガ故ニ其所爲皆幼慮
ナリ能々考ベシ乳繩ヲ取テ甲冑註文ヲ
セル者ハ其儀而已大一二テ餘ノ事ハ其
家々ノ佳例ニモ任僧徒社人包丁人其外
ソレクノ能者ニ手柄サスベキ事ナリ己
一人引請テ取行事ハ腹黒ト云ベシ

大将老臣目附註文者使番執筆近士何レモ
慰計目麻上下著之也醫師者十徳著之也慰
計目同断也

一貫云前二小笠原家伊勢家ナドノ書ニ
ハサラズト云シハ此所ノ趣ニテ知タリ
足利家代ノ頃ノ役名ニハ見ザル異ナル
者ナリ又慰計目麻上下杯ノ著用ハ今當
ノ事ニテ古風ニ非_スサレバ此式掌ト云事
ハ全遠藤得心先生ナドノ作意ナルベシ

足利家代ノ書風ハ異ナリ又其後ノ文章
モ今當ト比トシカラズ考ヘシ

作法條々

大将ハ使番一人近士二人連ラ席ニ望ミ著
トヒトシク摩利支天ヲ可有拜禮使番近士
者次之間之中程ニ扣ヘ居ル也偕拜終テ麻
利支天ノ前ニ座シ使番ヲ以老士ヲ呼一人也
老士出テ賀ヲ述テ大将ノ右ノ上座ニ著ク
次ニ近臣ヲ以テ醫師ヲ呼フ醫師出テ賀ヲ

述テ大将ノ左ノ上座ニ著ク近士ヲ以テ執
筆ヲ呼フ執筆出テ賀ヲ述テ大将ノ右ノ中
座ニ著ク尤執筆ハ硯箱ヲ持参シテ我前ニ
置也次ニ使番ヲ以テ註文者ヲ呼フ註文者
出ツ尤白木三宝ニ乳繩并目錄ヲ居ル繩ヲ下ニ
シテ其上ニ目錄ヲ置カケ持参シテ大将ノ前ニ直シ置
キ引下ツテ中ノ中座ニ著キ賀ヲ述ル也右
使ヒノ近士硯箱ヲ其節一所ニ持参シテ其
蓋ノ上ニハサミヲ一丁ノセ次ノ間ニ扣へ

居リ註文者中ノ中座ニ著キ賀スムトシク
右ノ硯ヲ註文者ノ右脇ニ直シ置也偕大将
其乳繩目錄ヲ執リ開見テ又三宝ニ居へ置
右ノ方へ少シヨセ置玉フモノ也次ニ近士
引渡シヲ持出テ大将ノ前少シ左ノ方へ糺
繩三宝ト並へ置ナリ右老臣目附註文者使
番執筆近士医師不殘
ナリ帶刀次ニ大将註文者ニ命ジテ乳繩目錄ノ
通りニ執ラセ玉フ也此時註文者帶刀ヲ我
座ニ拔置硯箱ヲ持チ大将ノ前近ク參ル偕

近士帶刀ヲ我座ニ拔置参リテ大将ノ上下
ヲ又ガセマイラセ偕大将将机せいしニカ、リ玉
フ也此時注文者立アガリ右ノ繩ヲ取テ前
ヨリ乳繩ヲ伺フモノ也此時手傳ハ醫師也
凡醫師之役ハ右繩ノ當所穴
ノ度量ヲ云スヘキ爲ナリ 偕注文者乳繩
ヲ伺テ執筆ニ渡シ御乳繩ト告ル執筆ハ圖
ノ如ク其繩名所ヲ書記シ硯ノ蓋ニ入置也

其圖

御乳繩

餘ハ是ニテ可知

偕九ヶ所ノ繩不残スシテ其繩ノ断端ヲ註

文者ヒロヒ集メ硯ノ蓋ニ入レ持ツテモト
ノ座ニ直リ硯ハ蓋氏ニ我右ノ脇ニ置右執
筆ノ所ニアル御乳繩ノ書付并其数ヲ改メ
右三宝ニ目錄ヲ下ニ繩ヲ上ニシテ亦始ノ
如ク大将ノ前右ノ方ニ直シ置キモトノ座
ニ著キ帶刀シテ御祝アルベシト言上スル
也此時大将亦上下ヲ著シ引渡シテ戴玉フ
其時註文者言上ノ賀詞ハ御身作堅フニ未
廣フ御悦ヒノ由云フモノ也右終テ大将洗

米神酒等頂戴可有之并老臣註文者頂戴ス
ルモノ也

一貫曰右祝禮取行事ナドハ其家々ノ風
儀佳例ニモ仍ベキ歟得心先生ハ右ニ見
タル所ヲ流義ト立テ取行事ナレハ是ニ
任スル家々ハ此通ニテモ濟ベシ但シ醫師(医)
ヲシテ此手テ傳ツダヒニ取事當所穴ノ度量ナト
ハ下地ヨリ示シメ合アハス置タル上ナラデハ差懸
煩ワスラハシキ事ナルベキ也醫師ハ勿論甲冑乳

繩ノ度量ハ知^ルヘカラズ武士モ亦灸針穴
ノ度量ハ知^ルヘキ事ニアラザレハ下地ヲ
馴合^ハザレバ成ガタキ事ナリ乳繩ノ度量
ハ此方ノ事ニテ是ヲ辨タル上ハ醫師ヲ
シテ相手取ニハ及ザル事ナリ乍去貴家
ノ風俗ニハ條事^{カハル}ノ類ハ何程モ有モノナ
レバ如此ナラバ其儘ニテモ然ベキニヤ
免角其家々ノ制度ニ任スベシ私ニ製作
スル事ニハ非考ベシ其餘ノ次第祝事禮

儀等ノ事ハ免角時宜ニ任テ可ナリ右役
人ノ配席祝禮等予ガ所存ナキニアラサ
レ氏全躰其家風其時宜ニ順テ私ヲ不出
ヲ根本トスレハ爰ニ其等ノ差別ヲ記サ
ズ

右乳繩ノ上包ヲシテ其儘三宝ニ戴セ引渡
共ニ祝義ノ品差揃へ甲冑師ニ送ル者也目
録ハツカツサヌ叟也右祝義ノ品ハ大将ノ
身上知行ノ高下ニ應シテ可遣先ハ樽代金

五百匹位ヨリ銀三枚五枚モ可遣尤肴ハ箱
肴タルヘシ註文者ニ時宜ニヨリ其席ニテ
大将盃ヲ賜フ叟アリ尤祝義ハ樽代箱肴可
遣之

一貫曰祝義ノ樽代ナトハワキテ私ニ押
窮事ニハアラズ其家々ノ風義佳例モ有
ヘキナリ但_レ其役手ヨリ相談ニ及_レナバ画
人ハ註文者ノ手寄ナレハ其遣物ノ多少
差別ノ義モ所存ヲ談ズル事モアルベシ

其義モナクシテ此方ヨリ祝儀遣物等ノ
事ヲ言立ナトスル事當ベカラズ卑劣ナ
リ遠慮アルベシ

傳ニ曰床ニ摩利支天ヲ祭り洗米二三ツ葉
ヲ置キ胎ノ劔ノ式三献可有之ト也

一貫曰此胎ノ劔式ノ如ト云事予ハ短學
ニテ一向知サルナリ近代ノ射家者流牽
合附會シテ鳴弦ヲ銘劔ニ作甚シキ者ハ

産屋ノ幕目ノ儀ニ棒鞘ノ刀カタナナドヲ床飾
トシテ鳴弦ヲ銘劔ニ代カエル族モアリ是等
ノ事ヲ臆オモウニカノ胎ノ劔ノ式ト云事ハ産
屋ノ鳴弦ナドノ類トモニヤ又劔道供法
ノ式ト云事トモハ一向聞モ及ハサル事ナ
レバ何ト評セン様モナキ事ナリ能知ラ
ン人ニ尋問シテ會得スベシ其外洗米ニ
三ツ葉ヲ置事モ何ノ葉ト云事モ一向知サ
ルナリ能知ラン人ニ尋ベシ

行ノ肌堅メノ法ハ床ノ飾リナシ尤引渡迄
也其三宝ニ直ニ繩ト目錄トヲ戴スル也目
附近士医師迄相詰ルモノ也

又繩ノ伺様ハ七ヶ所也九ヶ所伺ヘハ本式
ニナル叟也故ニ九ヶ所ノ中咽繩類繩ヲ除
キ残り七ヶ所伺フモノ也大将目附註文者
医師近士平服ニ麻上下也萬々畧式之叟也

乳繩式掌之卷畢_{おわんぬ}

一貫曰行ノ膚固トハ何ノ事ゾヤ此乳繩
ヲ取計事ニ行ト云義ハイカゞヤ眞草行
ナド云事ナラン好事千萬ト云ベシ但畧
制ノ祝事ハ有ベキ也其家々ニヨリ其

時節ニモ随ベキ更ナレバ禮容等精粗ノ
次第ノ定ベカラザスハ勿論ナランサレ
ド行ノ肌固ト云繩ノ伺様ハ七ヶ所也九
ヶ所伺バ本式ニナル事ナリトアル以下
ノ文面一向合點ナラズ其祝禮ヲ取行事
ハ精粗何程モナリテ眞草行トナリトモ
何トナリトモ云テ可ナラン繩ヲ取ヘキ
所ノ數ヲ畧セルト云事ハイカゞノ事ヤ
ラン乳繩ヲ取ベキ所ハ畧シガタリ貴人

ノ乳繩ハ精ク取賤者ノ乳繩ハ粗ニ取ト
云事サヘナキ義ナリ況同貴人ノ乳繩ノ
數ヲ畧スルト云事ハ決テナキ義ナリ甲
冑新調ハ己ガ身軀ニ能相應シテ専働自
在ニ血戰ヲ思儘ニ爲ベキトテ乳繩ヲ大
切ニ取事肝要ナルニ彼眞草行ノ取様ニ
テ乳繩ヲ勘畧セルト云事ハ本意ニアラ
ズ用ニタラズ可考眞草行ナド、云事ハ
其祝事禮制ノ精粗ハアリナン乳繩ノ可

取所ヲ取ザルト云ハ甚不實正ト云モノ
ナリ乳繩ノ取様ニ眞草行モ貴賤ノ差別
モナキ事也能々其本意ヲ失ザラン事ヲ
案^{オモフ}ベシ其此所ノ平服ニ麻上下トアル文
面ニテモ古書ニアラザル事ヲ知^ルベシ
一貫曰甲冑ヲ製スルニ乳繩ヲ取ト云事
ハ何ノ頃ヨリカハ仕始ケン窺^{オモウ}ナラズ臆
二甲冑ハ身體ノ匭^ル匱^{ヒツ}ニテ矢石劔矛ヲ防
禦セル事ヲ主用トセル物ナレバ全備其

質ニ倣ヲ是ヲ作事ハ自然ノ理ナリサレ
ハ身躰ノ快入親テ相合シテ應用自在ノ
働ナルベキ爲ニ其乳繩ヲ定事ニテ勿論
人ニハ大小肥瘦ノ差別アリ其勢ヲ異ニ
スレハ己ガ甲冑ヲ新調セシメン時ハ必
其身ノ恰好ヲモ計試シ其身ニ應ベキ様
ニ其寸尺ヲモ取計ハン事ハ勿論ナラン
ナレド古昔ニハ如何ナル事ヲ爲テ其恰
好ヲモ定タルヤ詳ナラズ臆ニ吾朝ニ此

物ヲ見タルハ日本書紀神武天皇紀ニ介
冑之士ヲイクサノヒト、讀セタリ亦此
物ヲ造作セシ事ハ續日本紀養老六年條
紀伊國鎧作名床ト見タレバ此物ヲ製ス
ル事ノ舊ヒサシキヲ知ヘシ又古昔官ニ貯テ其
非常ニ備ラレシ甲冑ハ其大躰ヲ圖トシ
テ製造アリシナラン今當トテモ國郡ノ
主タル家々ニハ甲冑數百領ヲ庫藏シテ
武備ノ專一ニナセル事其義而已ニ才井イ

テハ古今不異ト謂ベシ其大躰ヲ圖トス
ルトハ不意ノ亂逆ニ及デ衆人ニ配分ス
ベキタメナレハ大小輕重精粗ニハ不拘
貯置事ナリ此義予ガ愚意アリ爰ニ不贅
考ベシ凡テ古昔ニ見タル甲冑ノ制作ハ
近世ニ所用ノ甲冑ノ製トハ大ニ異ニシ
テ古製ハ大躰普通ノ人大小肥瘦ニハ不
拘著用ナリ易製ナリ故ニ源平共ニ重代
ノ名甲アリテ子孫ノ重寶トセララル、事

異本保元物語異本平治物語源平盛衰記
参考太平記ナドニ見タル所也其外武士
ノ家ニ先祖累代取傳鎧杯云物軍記物語
等ニ所々ニ見タリ是等バ近代ノ甲冑ト
ハ其製差別アリテ何人ニテモコ、ロヨ
ク著用ナレル所ノ製ナリ其事面授ニア
ラザレバ會得ナリカタシ不審ナル人ハ
予ガ許ニ尋問アルヘシ其古製ナル鎧ス
ラ普通ニ超遇セル人ハ著用成ガタシ故

ニ参考保元物語ニ重代ノ鎧ヲ一領ヅ、
五人ノ子共ニ著セ我身ハ薄金ヲゾ著タ
リケル源太産衣ト膝丸トハ嫡々ニ傳ル
事ナレバ雜色花澤シテ下野守ノ許ヘ遣
ケル爲朝冠者ハ器量人ニ勝レテ常ノ鎧
ハ身ニ合ザリケレバ著ザリケリト云云
爲朝ハ七尺計ナル男ノ目角ニツニキレ
タルガ紺地ニ色々ノ絲ヲ以テ獅子丸ヲ
縫タル直垂ニ八龍ト云鎧ヲ似セテ白キ

唐綾ヲ以テ威シタル大荒目鎧同獅子金
物打タルヲ著マヽニト見タリ迺見ハ己
ガ身ニ其相應ナル甲冑ヲ別製シテ著セ
シ證據ナリ如斯新調セル則ハ必其身ノ
寸尺恰好等ニモ考合シテ製作セシモノ
ナラン其ナケレバ所々身軀ニ不相應ナ
ル所アリテ甚著苦ケレハ身軀ノ働自在
ナラズサレバ此所ニ於ハ肝要ノ事ナレ
バ古昔ノ騎戦ヲ専務トセル風俗ニテモ

頗多念ニシテ製セシメタル事ハ勿論一
ラン察スベシ但今當ノ乳繩ノ取様トハ
異モ知ベカラズ古書ニ乳繩ト云更モ身
ノ寸ヲ計事モ記タル書硯當ザレバ詳ナ
ラズイヅレ甲ハ己ガ胴ヲ入ル物冑ハ頭
ヲ入ル物ナレバ己ガ身ニ飽相應セル所
ヲ穿鑿セバ胴ハ其寸尺ヲ取ベキ筈ナリ
兎ハ其頭ノ寸尺ヲ取ハ勿論ニゾ有ベキ
手足面躰等僉然ナリ乳繩ト云號モ其取

ベキ様モ古風ヲ知事能アタハザレドモ古昔ト
テサマデ外ニ仕様トテモアルベカラズ
胴ノ部乳ノ旋ヨリ太フトキ所有ベカラザレバ
此邊ホトリニコソ繩ヲモ當ベケレ元來古製ノ
鎧ト云物ハ今當本札ト云物ノ仕立ニテ
其製モ異ニテ子孫ニ取傳テ常人ハ誰彼
モ著用ナリ易ヤスキ製ナリ此鎧スラ鎮西爲朝
ノゴトキハ別製セデハ不叶況近世應仁
ノ後天文頃ヨリ以來ノ制作ナル甲冑ニ

至テハ古製ノゴトクニハ非^ス鐵洞ノ蝶番
物オ、ク洞ノ形モ異ニシテ綿嚙モ平綿
嚙トナリ逆板モナク脇楯モ用^ヒザル事ナ
レバ古製ノ札洞ノゴトク身ニ親^{シタシ}カラズ
別シテ胴形ニ能相合セザレバ著用煩シ
キ故ニ強^{アナガチ}ニ穿鑿シテ乳繩ト云事ヲ第一
ノ規矩トシ假初ニモ新調ニハ乳繩ヲ取
事ニ至極セル也サレバ本文ノゴトク乳
繩取事ノ式トヤラン云事モ拵作法トヤ

ラン云事モ出來テ兎角吳言ケル様ニ成
タルナリサレバ乳繩ノ取様モ能々穿鑿
シテ會得スベキモノナリ

一貫曰乳繩ノ取様予ガ請傳タル所徐林
子ノ傳來アリ其趣ハ先是ヲ定ニ高計尺
ト云物ヲ以窮事ニテ其尺ノ一名ヲ鎧尺
又具足屋尺トモ俗稱ス此尺ノ寸ハ曲尺
ノ一寸一分五厘ヲ以此尺ノ壹寸ト定ト
ナリ亦平城画工岩井永繁ガ家傳ハ曲尺

ノ一寸一分ヲ以此尺ノ壹寸ト定亦同所
画人岩井可光ガ手代稻葉越中ト云者ガ
所傳ハ鯨尺ヲ本トシテ此尺壹尺ノ内五
分短キヲ奈良尺ト云一名曝尺トモ此奈良
尺二三分短ヲ鎧尺ト云則甲冑製作ノ諸
用ヲ積ル尺ナリト云ザレハ彼是ノ説一定
ナシ画工ガ家々ニ所傳セルモ此違アリ
予ガ師傳ノ趣トモ相違セリ此外軍家者
流故實者等誰彼ガ家々ニ傳タル鷹計尺

モ其異アル間敷ニアラズサラバ此尺ハ
甲冑ヲ定^ル尺トシテ乳繩ヲ定^ルニモ此尺ノ
積^リニテ取究^メ筆記シテ鎧師ノ手へ渡^シタラ
シニ彼等ガ心得タル所ト註文者ノ相傳
タル鷹計尺ト相反セル時ハ其甲冑ノ尺
合ニ相違出來テ其甲主ノ身體ニ不應然
則ハ新調ヲセシ詮モナキ事ニテ不埒千
萬ナリ能々效^{ならう}ベシ是ニ仍テ予ガ画工岩
井可光稻葉越中岩井永繁岩井延重等ニ

注文ヲモツケ新調セシメタル所ノ乳繩
ノ尺相ハ悉曲尺ニテ定_メ迺_テ其曲尺ニテ取
定タル由ヲ懇ニ鎧師共へ言聞シメ半端
仕立ハ下地ヲ廻サシメテ矢玉刀槍ヲ以_テ
コレヲ試_シ且_ツ甲主著用試_シサセ太刀ヲ遣_ヒ槍
ヲ振_リ弓ヲ引_キ馬上組合跪_キ時倒起趨_キ働シテ
所々ノ膚當_ツヲモ取調其煩_シキ所ニハ璽_シ
ヲ著_ツ其趣ヲ勲ニ書認能々鎧師ニ納得サ
セタル上ニテ塗ニ廻サセメ威立事ナリ

如^レ斯其實事ヲ試^ム其甲主註文者ト和同シ
テ其止^ルベキ所ニ止^シラメ覺悟シタル甲冑
ナラデハ實事ニアラズ此甲冑^(干)テ活物^{写シミス?}ト
云是ヲ著シテ己ガ存分ニ働^キ天命ノ期ニ
任スルニアラザレバ甲冑新調ノ趣意ニ
アラス能々考ヘシ令當故實者ナド註文
ヲ見^ルニ徒好古ノ僻ニ惰^(墮)落シテ時勢ニ不
應^ズ吏ヲナサシメ或軍家者流ナドハ一家
ノ理說迷^ヒ躩^ヒ方者等ハ徒ニ其禮法ニ凝付

ナドシテ盡^カ實事ニ雲泥セルナリ既ニ此
得心先生ガ本文乳繩式掌ト云事モ其儀
式トヤラン云ル事ト其乳繩ノ認様トハ
大^ヒニ勝劣アリテ乳繩取様甚^ク粗荒ニテ此
書ヲ熟覽シタリトモ忽ニ乳繩取計^ヒナリ
ガタシ是淺深厚薄ヲ分別シタルニアラ
ズ可考乳繩ハ乳繩ヲ認^ム事肝要主用トシ
テ祝禮等ハ其事ヲナスノ文品ニテ是ニ
次事ナレバ其家々ノ佳例ニ任^セテ可ナラ

ン又彼高計尺ニテ甲冑ノ事ヲバ定積セ
ルモノ也ト師傳ノ一偏ニ而已凝附テ此
尺寸ヲ以取定則ハ前ニ述タルゴトク其
習傳大ニ齟齬セル事アリテ實事ヲ失ベ
シ故ニ予ニ於ハ此尺ヲ不用專曲尺ヲモ
ツテ至極トシ鎧師ニ此事ヲ示合ルナリ
元來吾朝ノ度量ト云モノハ淡海公ノ撰

ナル令ニ出テ義解ニ凡度十分爲寸謂度トハ

寸尺丈計也所以度長短也分者以北
方柜漆中者一之廣為分柜者黑漆也十寸

(櫃)(漆)

爲_レ尺_ト一尺_ト二寸_ヲ爲_二大尺_{一尺}十尺_ヲ爲_レ丈_トア
リ此大ノ尺ト云ハ今ノ鯨尺ト云モノナ
ラン此尺ニ二寸短ハ今ノ曲尺是ナルヘ
シ臆_フニ此分ヲ定_ルニ黒漆ヲ以_テ一分ト定タ
ルハ其始ヲ造化ノ所爲ニ據シハ誠ニ無
盡不易ノ妙ト云ベシ此令ハ養老二年右
大臣不比等奉勅撰義解ハ天長十年清原
真人夏野作也養老二年ヨリ今文化四年
ニ到テ凡_ク千九十年ノ春秋セリ天長十年

833年 令義解

719年 養老律令

ハ養老二十年ヨリ一百十六年後ナリサレ
バ其舊叟ヲ慙ベシ如此天下通用ノ曲尺
ヲ以テ定事ナレバ正義ト云ベシ具足ノ
事ニハ必鷹計尺ヲ用モノ也ト一槩ニ心
得ハ偏屈頑愚ノ至ニテ可笑ノ甚キモノ
也是而已ニモ不限軍法者故實者ナド云
者多分画工ガ家流ノ事ヲ信仰シテ取用
者アリ是差別ヲ不辨カ故ナリ凡テ武士
ノ所用ト賣職ノ者ノ所用ト差別アル事

ナリ甲冑而已ニ不限刀身ノ目利馬ノ相
形ナドヲ見事モ亦相同本阿彌カ目利或
磨研師道具屋等ガ目利ト武士ノ目利セ
ル心得トハ大二異事ナロトモ今當ノ武
士刀ノ目利ト云ハ多分本阿彌家ノ目利
ヲ學デ是ヲ本意オモヒ馬ヲ相スル事モ
馬父ガ所爲ヲナラヒテ是ヲ本義トス甲
冑モ鎧師ノ傳説ヲ本用ト心得テ餘念ナ
キ者アリ故二甲冑註文ニモ鎧師ニ馴テ

彼ガ意ニ随_レユエニ大_ニ實正ヲ失_レ而已カ
ハ過分ノ料金ヲモ犯_カサル、ニ至_レリ考ア
ルベシ既ニ此乳繩式掌之卷ハ画工ガ家
傳ヲ信用シタル趣文中ニ察セラル、也
又此本文武器普録及口傳誌未書等二分
明ニ見タル所アリ如斯鎧師ノ家説ヲ信
シテハ正路事實ノ故實トハ矛盾_キシテ行
違事間々多シ是ヲカ、グルニ違アラズ
トイエドモ其一端ヲ左ニ顯ス餘ハ是ニ

テ察スベシ其證據ハ彼武器普録口傳誌
日本式御鎧ト御腹卷御胴丸ノ註文ト尋
常ノ甲冑ヲ製スル好ニ書トハ甚異ナル
者也本式ノ御鎧ノ時ハ檀紙ヲ豎紙ニテ
左前三ツニ折テ譬ヘハ

御註文

御冑四方白

小櫻威御鎧

一兩

御好書別紙有之

以上

如是認テ御乳繩ニ相漆鎧師ニ相渡ス事
也是御鎧註文ノ古法也右ノ如ク相認ル
事ハ古實タリトイヘ氏甚タ委シカラズ
相聞レ氏摠テ本式ノ鎧ニハ古今定レル
故實法式在之尋常ノ甲冑ノ如ク物數奇
ニ任テ古法ヲ省キタルヲ本式ノ鎧トハ
呼難シ此故ニ別ニ註文無之別紙好ミ書
ニハ我家ノ紋所金物ノ模様金銀銅錫鉄
ノ差別家地ノ織色等ヲ記シ載ル迄ノ事

也鎧師功者ニテ家柄ノ者ニナラサレハ
本式ノ鎧ヲ製サスル事ハ用捨可在之重
器也卜記アリ又同書鎧之卷本文及口傳
誌ニモ記セル小櫻威ノ文曰紅ニ白糸組
交タル糸ニテ威タルヲ云也又摠薄紫ニ
テ胸一ハイニ櫻花ヲ紅糸ニテ威シ耳糸
濃紅ニテ威シタルヲ云ト也又一説ニ薄
紫ノ糸ニテ威シタルヲモ小櫻ト呼ヒ或
ハ小櫻ヲ染付タル革ニテ威タルヲモ云

リ又或説ニ濃紅薄紅濃紫薄紫萌黄糸組
交タルニテ威タルヲ本式ノ小櫻威氏云
リ此義然ルヘキ坎口傳誌ニ或傳ニ札ヲ
黄ウルシニテ塗りタルヲ別ニ薄キ紫糸
ニテ威タルヲ小櫻威ト云ヘル説モ有也
也傳曰小櫻威ノ事青漆ノ平札ヲ櫻ノ葉
色ノ糸櫻色ハ染色ノ本ヲ以テ摠糸菱縫
氏ニ威事也但シ青染ハアイラ入テ塗タ
ルモノニテ今ノロウ色ト云ヲ取チカヘ

テ萌黄ヲ青染ト云紛シ易キ事也青黄赤
白黒ノ内黒ハ黒塗ニテ油煙ヲ入ル故黒
ト云ヒ世俗ニ花塗ト唱ル也其青漆ノ黒
札ヲ櫻糸ヲ以テ威ヲ小櫻威ト云小櫻ト
ハ山櫻ノ事也甲冑來由ノ條ニ小櫻威ノ
事毛薄紫糸加二色糸而以威之名也或人
曰小櫻威者染付革威也是表櫻華散懸相
也云云地塗黄色也清見原天皇御宇始也
云云ト記テ南都御甲冑匠盤井祥甲子ト

（天武天皇）

見タリ此傳來ヲ口傳誌ニ載ラレテ別傳
トサリタレバ鎧師ガ説ヲ信仰アル事疑
ラクモ非此盤井祥甲子ガ盤ノ字ヲ用事
聞オヨヒタル義アリ予平城画人岩井庄
三郎可光ト云者一貴人ノ甲冑ヲ註文ニ
テ新調セシメタル事アリキ出來ノ上何
事モ相濟タル後予ニ願乞テ曰是迄甲冑
用向相達タル上此度貴人ノ御著料ヲ調
進セシムル事叶冥加家業ノ面目コレニ

不過此上ハ岩井ヲ盤井ト相改テ仔細アルベカラズ盤ノ一字予ガ指画ニテ今度相改度は故實ナル由ニテ再應乞需ケレドモ予其故ヲ不通ニ不知固辞シテ是不順其儘ニテ打週タリサレバ是等ノ事画工ガ家ニ其故モ有ケルト見レハ此盤井祥甲子ハ家業ノ義ニ於ハ功者ト見タリ然ニ此小櫻威ノ説多端ナリ其外威色目威區説迂遠ノ事オ、シ係画人ヘ得心

先生ノ鎧註文其式ノ認様ト云事ヲ記テ
祥甲子ガコトキ者ニ渡タランニハ何ノ
小櫻威ヲモツテ正義トスル乎否乎亦得
心先生鎧之卷ニモ口傳誌ニモ記サレタ
ル小櫻威甚多説ナル物ナルガ何ノ小櫻
威ヲモツテ是トシ何ヲモツテ非トセラ
ル、乎右書類其記者ハ祥甲子ガ餘ニ見
サレドモ咸画工等ガ家傳ノ書ニハ此類
相違アルヘカラズ其書例ニテ察セラル

ルナリ得心先生ガ威毛ノ趣ニテハ甲主
所好ノ小櫻威ハ譬ハ紅ニ白糸組交タル
威ゾト心得テ右本式トヤランノ註文ヲ
相認テ遣^ス攸^ス鎧師カ心得ニテハ摠糸薄紫
胸一ハイニ櫻花ヲ紅糸ニテ綴耳糸濃紅
ニテ威タラバ大ニ相違スベシ又註文者
札ヲ黄漆ニテ塗薄紫糸ニテ威ベシト心
得テ遣^シタランニ青漆ノ平札ヲ櫻葉色糸
ニテ威タラバ甲主モ註文モ案ニ相違ス

ベシ此餘ノ小櫻威モ何威モ多説ナレバ
皆シカリサレバ本式トヤラン云ル彼檀
紙ニ小櫻威御鎧一両ト而已書テ別紙ニ
金物家地紋所抔ヲ認是古法トヤラン故
實トヤラン云事ナレ凡此註文ノ仕様モ
亦乳繩鷹計尺ト同様ニ相齟齬シ言語同
斷ノ事ニナリヌベシ蒐^ル相違セル覺束ナ
キ事ドモノ妄談空論ヲ書ナガラ嗚呼ガ
マシク本式ノ乳繩本式ノ註文或古法古

實或家柄ノ鎧師ニアラザレバ本式ノ鎧
ヲ製サスル事ハ用捨アルベキナド、書
ケル事ハ抱腹ニ絶タル事トモナリ是等
ヲ眞顔ニテ傳者モ亦是ヲ倣者モ實ニ兒
戯ノ遊ニテ不埒千萬ナル事ナリ前ニモ
如述私二本式杯云事ヲ拵タレハ係不都
合ノ事モ出來セルナリ又古物ノ今ニ存
在セル所山城國藤杜社藏崇道天皇鎧同
八幡社藏源義家朝臣鎧藝州嚴島社藏源

義家朝臣鎧同藏小松重盛朝臣鎧同藏無
主鎧鞍馬寺藏源義經朝臣鎧平城春日社
藏義家朝臣鎧義經朝臣鎧嚴島藏大内義
隆鎧備州上寺藏佐々木盛綱鎧武州御嶽
藏畠山重忠鎧甲州菅田天神藏楯無鎧彼
是ノ圖品小形等ヲ横写セシ物モアリ熟
覽セシ物モアリケル異同一定ノ製トモ
不見其中ニモ小松重盛朝臣ノ鎧ナル物
ハ殊ニ異製ナル所アリテコレヤ本式ト

云事ヲ不知勿論正史實録古物語軍記等
ニ本式鎧ト云物ノ事モ其故實ト云事モ
古法ト云法モ見アタラズ彼本式定法ナ
ドノ、シル事ハ悉、画人等ガ家傳ノ妄説
信用スルニ不足能々可考右小櫻威ト云
物ノ實正ハ糸威ニハアラデ革威ニ必セ
ルナリ則東鎧ニ小櫻革威ト云ル是ナリ
野史ニ小櫻威トモ櫻威トモ小櫻ヲ黄ニ
返タルトモ記セルナリ此物ハ鹿滑ノ白

革ニ藍ヲモツテ櫻ノ文ヲ打タルモノ也
此革ヲ斷切テ毛引ト云物ニ威タルナリ
亦是ヲ藍白地トモ云ナリ但藍白地ノ革
ニ文形ノ異モノモ有ケレハ委イフトキ
ハ藍白地ノ小櫻文革ト云ベケレト畧シ
テ小櫻威トモ櫻威ト而已モ呼事ナリ亦
藍地ニシテ白文ノ小櫻韋モアリ赤小櫻
ヲ黄ニ返タルト云ハ此文形ナル韋ヲ再
黄色ニ染返事ナリ其スレバ白地ナル所

ハ黄ニ染テ櫻文ノ所ハ萌黄色トナル也
又藍地白文ノ櫻韋ヲ黄ニ返セシハ地ノ
色ハ萌黄ニナリテ櫻文ハ黄ニナルナリ
櫻ノ文ハ大小アリ花形モ一定ニモ非_ズト
イエドモ右二品ノ外ニ不出彼盤井祥甲
子ガ家傳多説ナル内ニ小櫻威者染付革
威也ト云是ナラン文形ヲ黄ニ染返事ハ
今俗小紋ノ染色ニ納戸茶返茶目引ナド
云染色ノアルガコトシ何ノ子細モ煩シ

ク云ル意味アル染色ノ威ニハアラズ唯
小キ櫻ノ文形ヲ藍ニテ打タルト藍韋ニ
櫻ノ文ヲ白出タルトノ韋ヲモツテ威タ
ル故ニ小櫻威ト云是ニ黄色ヲ懸タルヲ
黄ニ返タルト云何ノ仔細モナク易ラカ
ナル事ナリ参考保元物語ニ宇野七郎親
治小櫻ヲ黄ニ返タル鎧ヲ著源平盛衰記
ニ渡邊丁七唱十郎藏人行家佐々木四郎
高綱著之平家物語ニ渡邊長七唱熊谷ガ

旗差等著之又黄ニ不返小櫻威ハ源平盛
衰記ニ根井大彌太行親著之義經記ニ佐
藤四郎兵衛忠信著之同書ニ義經ヨリ繼
信忠信ガ子共ニ所賜此威ナリ或高館草
子ニモ見ヘ又今ニ存ゼル此威ナルモノ

藝州 劔嚴嶋社藏古鎧藍地白文ノ小櫻韋威
ナリ此画伊勢家ヨリ出テ予モ模寫セリ
亦甲州菅田天神社藏楯無鎧ト云物ノ圖
ヲ見タルニ是ハ白地藍文ノ小櫻韋ヲ黄

ニ返タル威ナリ如此何ノ紛シキ事モナ
キ威毛ニテ古物ノ舊社ニ遺存シヲ或古
書ニモ見ヘ彼是其證據明白ナル事ナル
ニ種々色々ノ六个數異説ヲ立テ此威ト
セルハ何事ゾヤ是故實ノ目附アシク賣
職ナル画家共ノ妄傳ヲ信仰セルガ故ニ
蒐事ニナレルナリ此一个条ノ威モ而已
ニ不限得心先生ガ著述セル所ノ威毛色
目ハ正義ハ稀ニシテ悉妄談ナリセメテ

妄説ニテモ其説多端ニモアラズ画人カ
家傳モ一訣セシ事ナレハ假令故實ニハ
違タリトモ得心先生ノゴトク是等ノ妄
説ヲ信仰シ彼本式トヤラン云事ノ註文
ヲ認テ鎧師ト黙頭合テ其甲ヲ製威セシ
メンナラハ何様異製ノ威毛トテモ出來
スベシ彼區説ナル威モニテハ本式註文
ナリト子細ラシク眞顔ニナリテ相認ウ
ヤクシク鎧師ガ手ニ渡タリトモ鎧師モ

(惑) 写シミス?

何ノ威毛ニカ定ヘキト迷惑スヘケン歟
多説ナル威毛ナル中小櫻威ハ何ノ小櫻
威ニスヘキヤト再應註文者へ相伺ンハ
彼本式トヤラン好事ナル認様ハミナ空
事トナリテ恭壇紙ニ小櫻威御鎧一両ナ
ト詮モナキ次第ナリ前ニモ此式ト云事
ヲ難シタルコトク何者カハ定タル本式
ナルヤ小笠原家古書未書類予カ祖父大
野正堯小笠原持長ヨリ傳來ノ書類今ニ

家藏ノ書ナルガ是等ノ數書ノ中ニモ曾
テ不見伊勢家ノ書類ニモ不及聞サレバ
足利家ノ用ラレシ故實ノ家柄ニモ聞エ
ザル珍說ヲバ何者カハ得心先生ニハ傳
タルヤ故實ヲモ心懸既ニ武器普録トテ
其題號ヲモ押出タル書ヲモ著述シテ衆
人ニ傳ラレシ程ノ事ナレバ猥ニ一己ノ
工夫而已ヲモツテ本式ノ古法ノト嗚呼
ガマシキ事ハ立ラレマシサレド其出所

モ不顯證據トテモナキ事ナレバ是非モ
ナキ次第ナリ何様彼是考合ルニ病煩ノ
空言ノゴトキ十方モナキ事ナレバ取ニ
モ不足評スルニモ不及其儘ニテ何ヲイ
フニモアラザレ氏係書物ヲモツテ尋問
アル則ハ是非ナク其差別ヲ演計ナリ我
得心先生ニ恨ナシ大言ヲ吐ケルモ正路
ノ故實ニ導ントノ事ナリ又此小櫻威ニ
ハ不限諸々ノ威毛武器普録ニ所傳ハ無

稽無證妄說迂遠杜撰ノ事而已ニシテ取
不足新井白石先生ニ藏スル所ノ古鎧ノ
色目伊勢安齋先生ノ鎧色談鯁江拙齋翁
ガ色目考ナド題セル書類ハ右ノゴトク
妄談ニハ非マヽ寥モナキニモアラザレ
ドモ別論ニテナニシテ八九マデモ實正
ノ說而已ナリ必彼書類ヲ往見考合スベ
シ予モ模写シテ藏書トセリ元來古鎧ノ
威毛ト云ハ近世ノゴトク糸ノミヲモツ

テ云ニハアラズ亦札ノ色ヲ以_レ漆種々ノ
色ニ塗分糸ノ色ト取合テ威ノ名呼トセ
ルニアラズ或_レ耳糸一筋ニテ其名穰ヲ異
トスルニアラズ何威ニテモ札ノ塗色ニ
不均耳糸ノ論議モナシ札ハ悉黒塗ナリ
耳糸モ啄木ナリト知ベシ或_レ革ニテモ威
或綾ニテモ威或_レ錦ニテモ威事アリ其物
ニ依テ威ノ名目ヲ呼分ナリ或_レ糸ノ色目
モ古今異同モ有ケレドモ何ノ威トテモ

迂遠ナル威ノ名ナシ打見ト其儘能聞エ
易キ様ニ名呼セルモノ也委ハ予ガ著述
セル所ノ威毛考ニ是ヲ記シ又此書ニハ
乳繩ノ事而已ヲ談ズルナレドモ其差別
ヲ述ンカタメニ止事ヲ不得小櫻ナル威
一品ノ論義ヲナス能々考アルベシ
一貫曰徐林子予ニ傳授セシ乳繩ノ取様
ト云ハ山孤先生傳ニテ迺山孤先生懷紙
録ニ見タリ其書ニ曰乳繩定様ノ事其人

ノ乳通_リニアテ、取_ル故ニ乳繩ト云ナリ又
一説ニハ兩膝ヲクマセ兩手ヲ突セテ乳
通_リニアテ、定ムヘシ如是スレハ胸ノ
通_リ十分ニ太クナル故ニ乳繩ニ違イ無
之共云_レリ扱御歴々ノ乳繩定ルニ本結類
摠テヨリタルモノヲ御乳ニアテ候事甚
失禮ノ義ナリ此説心アリ但今當ノ本結
ト云物便利ナリ兎角心得
テ其家其時其人ニ因テ時宣アルヘシ本式ニハ奉書紙ヲツ
キテ平本結ナトニ半ノ數二三ニタ、ミ

テ前ヨリ脊へ廻シ背ミヅニテ能^キ程ニ合
セ其所ニ墨ニテ印ヲ付テ其餘ヲ切トラ
ス御乳繩ノ寸尺并年号月日ヲ記シテ具
足師ノ方へ相渡事ナリ扱兩乳繩ニ増減
ノ習ト云事在之喩ハ三尺ノ乳繩ノ時ハ
古流ニハ胴ノ一个輪ニテ高計尺二寸五
分ノ増也中頃ハ一ノ側ニテ三寸延ナリ
當時ハ一ノ側ニテ四寸増ナリ是縫小札
胴ノ積也鉄下地ノ桶側ノ類摠テ鉄鍛ノ

下地ハ薄_キモノ故ニ乳繩ヲ少延テ宜シト
セリ二三四五ノ側ハ一ノ側ニ准シテ乳
繩ヲ減スル事也又本式之鎧ニテモ腹卷
ニテモ乳繩常ノ通_リニ取候ヘ共此乳繩ハ
一ハイニ縫立テ増ヲ不入也是ハ一ハイ
ニ縫立レハ鎧ハ右ノ脇腹卷ハ背ニテ能
ホトニ明事也ト記サレタリ
一貫曰右乳繩ト云事ハ何ヲモツテ其璽
極トセルニヤト徐林子ニ尋問セシニ徐

(答)

林子荅テ何ヲモツテ定規トレルト云事
不傳厚紙ヲ裁切テモ用ヒ又本結ニテモ
可用ト教ゼリ予難ジテ乍去乳繩ト云來
タレバ何繩ノ類ヲ用テコソ其寸尺ヲバ
定メツベシ紙ヲモツテ乳繩ト云モ其名
呼親シカラズ又今當本結ト云物ハ至テ
近世ニ出來タル物ナレバ是ヲモツテ乳
繩ノ本用トセルモ如何ト問シニ徐林子
答テ定テ其昔ハ何ゾ組緒ノ類ヲモツテ

取定タルヤ一向不詳山孤先生ヨリ相傳
ノ趣ハ厚紙或本結ニテ定之貴人ニハ厚
紙ヲ用ル事ヲ禮トスト教ラレシ其名呼
ニハ疎カルベケレト兔角其要用トセル
所調達シスレバ厚紙カ本結ヲ用テ可然
ニヤト答キ故ニ予モ用之南都画工ドモ
ヘ乳繩ヲ下シタル時毎モ今ノ本紙ヲモ
ツテ定規トセリ古昔ムカシニ用タル所ハ難知
ケレト右ノ趣ニテ指支モナケレバ今當

ハ厚紙又ハ本緒ヲ用テ可ナラン猶能知
タラン人ニ尋スベシ

一貫曰臆ニ乳繩可取事ハ山孤先生傳來
ノ如ク兩膝ヲ組ミ兩手ヲ突テ乳通ニ繩
ヲアテ、定ムベシト云仕様可ナリ兩膝
ヲ組セキハ俗ニ安坐ト云是ナリ但安坐
ヨリ雛居ト云テ足ノ裏ト裏ヲツキアワ
セ兩手ハ己ガ臍頭ニ置也指先ト指先ノ
向ヒ相フ様ニ肱先ヲ外向フ曳木形ニ曲

テ居坐セルヲ可トス如是スレバ乳繩取
ニモ臍繩ヲ取ニモコヽロヨク取安ク且^{ソシク}
へ乳通モ臍通モ張相テ甚可ナリ予ガ乳
繩ノ取様左ニ記ス能々勘辨アルベシ
一貫曰乳繩ハ右ノ通ニ居坐セルヲ後背
ヨリ腋ノ下ニ繩ヲ入乳上ノ正中ニ繩ヲ
アテヽ左右凡ニ膈穴^{此穴ハ背中大骨七}
^{八ノ傍ナル穴所也}
ノ通ニ巡ラシメ太骨七八ノ間ニテ繩ヲ
ツキアワセ剪刀^{ハサミ}ヲモツテ切^{キリ}乳繩曲尺ニ

テ何尺何寸ト乳上ヨリ大骨七八ノ間ツ
キアワセナリト書附此繩ニ糊付ニ爲ベ
シ又紙ヲシテ乳繩ニ用時ハ背正中ノ所
ニテ折合墨印ヲ引テ園餘端ニ委細書付
ヲセルモ可ナリ

一貫曰臍繩取様右ニ同シ臍ノ正中ヨリ

左右凡ニ章門此穴ハ俗ニヨワゴシト云
邊大骨十三四ノ通ニ當所

ナ
リ
ノ穴ニ週シ大骨十三四ノ邊ノ正中ニ
テ撞合ナリ書附ノ事前ニ倣ベシ

一貫曰後背ノ立繩ハ右ノコトク居坐セ
ルヲ太骨ノ一ヨリ臍繩撞合ノ所ヲ際ト
ス後背立繩ノ事ヲ書附ベシ前ノ通ナリ
但前立繩ヲ先ト爲ベキナレ氏順次アシ
キユヘニ後脊立繩ヲ先ンツルナリ可考
一貫曰前立繩ハ璇璣穴此穴ハ胸骨第一
ノ穴所一ノ骨也
ヨリ臍ヲ際トスベシ書附前ニ可倣也
一貫曰腕繩ハ右ノ居坐ノ儘ニテ左ノ陽

谷穴此穴ハ腕首ニテ俗ク
ルフシト云邊ナリ二繩端ヲアテ

其ヨリ臂ノ正中ノ上ヲ週リ大推此穴ハ脊中大

骨第一ノ邊ヨリ通シテ右ノ腕ニメグ穴所ヨリ

ラシメ又肱ノ正中ヲ越テ右手陽谷穴前

ニテ切合ス但シ臂ノ正中ト大推穴前

トニ墨印ヲ付事ナリ是ヲ居成形ト云同

書附前ニ倣フベシ

一貫曰腕ノ廻リハ肩口ノ週リ一个所曲

池穴此穴ハ肘ト臂ノツガ井ノ巡リ陽谷

前ニ出ヨリ神門此穴所ハ腕首ノ内小指ノ方ニヨレル所ニアリ

魚際ノ穴此穴所ハ腕首ノ内大指週ナリ

右三个所ノマワリノ寸合ニテ定ナリ各

書附委細ニ爲ベシ前ニ倣フベシ

一貫曰右ハ居成形ノ寸取ナリ或眞直ニ

ナシタル寸取アリ是ハ左右ノ手ヲ身ノ

通ニ上下前後偏倚ナク指伸タル所ノ寸

尺ヲ取定事也其繩ノ穴所ハ右居成形ノ

穴所ト違フ事ナシ但居成形ハ肩口ヨリ

臂形コガミ腕首モ膝頭ニ指先相向タル

形サレバ摠躰ノ形屈曲タレバ其寸尺梢ヤ
長シ眞直方伸ナル所ノ腕ノ寸合ハ居成
形ノ取様ヨリハ餘程其寸尺短シト知ベ
シ何レニテモ其寸取り形ト其委細ヲ書
認鎧工ニ教ル時ハ寸尺相違ナシ其調粗荒
ナレバ寸尺相違出來テ甲主ニ不應能々
勘辨アルベシ

一貫曰脚脚繩ノ時ハ右ノ居坐ヲ尻居ニカ
エテ左右ノ掌ヲ後ニツキ先左ノ脚ヲ前

二躡^{フミ}出右ノ足ハ前ニ折曲^メ屣^{マタ}ニ納テ脚ノ

立繩ヲ取ベキナリ其穴所ハ犢鼻穴^{此穴ハス}

子ガシラヨリ解谿ノ穴^{此ハ俗ニ足首ト云所ノ前正中ノ}

穴所マデヲ際トスベシ又右足モ左足ニ

カワル事ナシ左足トタテカエテ寸ヲ取

キワムベシ勿論其仔細ヲ書附前ニ同シ

一貫曰足ノ週リノ寸ハ委中^{此穴ハ俗ニヒツカバミ}

ト云所ノ通りヲ巡シ犢鼻^{前ニ出ル}ノ穴ノウ

エ正中ニツキアワセテ其寸ヲ定ベキ也

同足首ノ廻リハ解谷前ニ見ユヨリ太谿ノ穴

是ハ足首外ノ穴所ナリノ邊ヲメグラシ解谷ノ前ニ出

正中ニテ撞合スル又腓コムラノ週リハ承筋穴

此穴ハ俗ニコムラト云所ノ正中ノ上ナリ承山此穴ハ承筋ノ穴ノ下邊也

間ヲ巡シ前正中ニテツキアワセナリ如

此三个所寸ヲ取テ委細書事前ニ同シ

一貫曰頭繩ハ強間ノ穴此穴頭後ノ正中ニアリヨリ

角孫ノ穴此ハ耳上ノ邊ニアリノ邊ヲ週テ攢竹ノ

穴此穴ハ眉毛ノ先根ノ所ナリノ上ニテツキアワセナ

リ書附前ニ倣フヘシ

一貫曰咽繩ハ瘕門穴此ハウシロニテ首筋正中ノ穴所ナリ

ノ邊ヨリ週シ前ハ天突穴是ハ香戸ニテ俗レムゲト云

所ノ上ノノ上邊ニテツキアワセナリ書

所前ニ倣フベシ

一貫曰頰繩ハ左頰車ノ穴此穴耳ノ下邊ニアリヨ

リ廉泉ノ穴此穴ハオトガヒ正中ノ所ナリノ下邊ヲ巡

シ右ノ頰車ノ穴前ニ出ルニテ止ム但此穴ニ

繩ヲアツル時ハ口クチヲ大ヒニヒラクベシ同

左ノ耳門ノ穴此穴ハ俗ニミ、ノヒヨリ

素膠ノ穴此穴ハ鼻先邊ヲ週シ右ノ耳門

前ニ出ニ止ル繩上下二个所ナリ書附前ニ

倣フヘシ

一貫曰頰ノ立繩ハ鼻筋ノ際ニ上端ヲ止メ

下ハ廉泉前ニ出ニ端ニテ切ナリ但口ヲツ

ムギタルトクチ口ヲヒラキタルト二筋寸取

ヲ爲ベシ書附前ノゴトシ

一貫曰右十二个條繩ノ穴所ニ取トコロ

ハ扁鵲真流圖例要穴發揮ニ出タル穴所
名義ヲ引用セルモノナリ但シ前ニモ述
タル通乳繩ナラバ乳上正中ヨリ脊中大
骨七八ノ間ニテ撞合ナリ曲尺何尺何寸
ト書附ベシ其外何レノ繩ニテモ僉コレ
ニ倣フベシ穴所名義ヲ記テハ画人ニヨ
リテ難通故ニイカニモ聞易キ様ニ通俗
ニ可認事肝要ナリ又右繩所取ノ中頰繩
ト云モノ繩ノ寸一通而已ニテハ面相ニ

ア井カヌスモノナリ平城^ナ画工岩井永繁
延重等へ命ジテ新調セシメタルニ塗下
地出来ノ上取寄^セ甲主ニカムラシメテ試
ニ内合親シカラズ所々アタリアリテ甚
煩キナリ面相モ見惡其形ハ明珍銘作ノ
ウツシニテ隆武ト穰スル容貞ナレ氏似
モヨウ又事ニテ两三度モ打改サセケレ
氏不出来ニテ止フ永繁云此物ハ繩取ノ

寸合迄ニテハ至極ニアラズ何レニ

⑦⑧

虫食いのため不確実

古頼當ヲ數多カムリ試テ其中ニテ是ゾ
能相應セルト心ニ叶フ古頼當ヲ手本ニ
シテ新作スレバ能其人ニ相應セリト話
シケレ氏所詮其面相モ不出來鉄味モ心
ニ不叶彼是ニテ新調ヲ止ケレバ此上ヲ
不知臆ニ古頼當ノ能相合セル物ヲ手本
トシテ新作セルト云事其義聞エタリイ
カニモ頼當類ハ繩而已ニテハ行届ザル
ハ左モアリナン是等ノ事穿鑿セバ此外

ニモ心附ベキニヤ能々實事ニ入テ考知
ラン人ニモ尋ベシ

一貫曰前ニモ述タル通り甲冑新調セル
ニハ專^マ其身ニ可^ニ相應製作セル事ハ古今
相同カルベシ但^レ古昔ニハイカバノ事ヲ
爲シテ其身ニ相合セル所ヲセルヤ不詳
既ニ鎮西爲朝ノ如キ人物ハ新製シテコ
レヲ帶セラレシ事異本保元物語ニ出タ
ル趣ナリ古代ノ鎧ハ大躰ノ人々ニハ相

應セル製造ニテ先祖疊代ノ鎧ヲモ其子
孫ニ相傳シテ家ノ重宝トセル事ナリ近
世ノ如キ製作ノ具足ハ古代ニ變シタレ
バ其人々ニ順テ是ツクラサレバ著用煩
キ事ナリ故ニ乳繩モ格別ニ穿鑿セル事
ニナリシナラン乍去太身ノ家々ニハ甲
冑數百領貯藏シテ非常ニ備事ナリ此具
足ハ乳繩モ大小異品不定事ニテ其時ト
シテ衆ニ配分セル期ニ至テハ其人品ノ

大躰ニ相應スル所ヲ以テ是ヲ渡ベキ事
ニゾサレバ甲冑奉行役ノ者ハ常ニ其品
類ヲ分別シ乳繩ノ圖度ヲ勘辨シテ其配
分スヘキ期ノ至ヌル時ハ少ノ手モツレ
ナク早速二分與シテ其人々ノ着煩アラ
ザル様ニ取捌ベキ事其奉行ノ忠勤ナリ
是等ノ差別覺悟モナクウカクト奉行セ
ルハ其名而已アツテ實ナク徒ニ其物ヲ
守護セルト云迄ニテ其器活物ニナラス

臨時當感スベシ覺悟第一ノ事ナリ司考
又番具足數物ナド云テ其製作ヲ對互シ
テ數多一色一對ニ威立タル具足アリ此
物ノ制今當所見セルニ乳繩ニハ不拍徒
ニ一領ノ寸尺ヲ以數十領ヲモ定ルナリ
是等ノ事モ其奉行ノ不實ヨリ出ル事也
其塗威等ハ一對ニ製スベキ勿論ナリ其
乳繩ノ大小ハサマクニ爲ベシ左ナケレ
バ其人ニ不應臨時ニ混雜スベシ大躰其

度圖タラン所ヲ取定置ベキナリ是モ至
然ノ時手モツレナク忽たらまちニ配分ナルベキ
覺悟ハ兼テ心得アルベキ者也是モ乳繩
ノ心得タル事ナレバ記置者也能々工夫
アルベシ

一貫曰甲冑新調乳繩ヲ以テ製セシムル
ハ其家職ナル實貞ノ画人ニ命スベシ今
世ハ画人等モ其細工乏キ故二甲冑製作
ノ家業ヲバ別ニナシテ古道具類ヲ交易

シ種々ノ賣買ニモ馴ル、故ニ職人ノ本
意ハ廢テ兎角人ヲ誑シテ金銀ヲムサボ
ラン事而已ヲ根本トス且^{ソノ}ヘ乱世ニ遠ザ
カリヌレバ其甲冑ヲ好メル者モ是ヲ製
作セル者モ僉今日安坐ノ了簡ニテ名聞
虚躰ノ事ニ而已流レ果テ眞實ノ画人至
テ稀ナリ能々穿鑿シテ甲冑ノ諸用ヲ達
スベシ又太刀屋ト云者アリ是等ノ者共
ニハ決テ乳繩ヲ以テハ詭命スベカラズ

其外武具類此手ノ物ハ用ユベカラズ此
者常住仕入細工ノ間ニ合事ヲ渡世トシ
諸道具ノ損料貸ナトヲセル賣人ナレバ
實事ノ用ニタツモノニアラズ能々是等
ノ差別ヲ可辨者也委ハ甲冑註文ノ事ヲ
別記ニセリ其所ニ述タリ爰ニ畧シヌ

右乳繩式掌之卷成由は伯州米城の

隊士伊藤和七覺貞武器故實に志

ありて同じ隊士日置源之右衛門忠稠に

固順して武器普録のこと傳受濟

たりしとそ日置忠稠か流傳を尋る

に瀬原右門勝秀か傳なり瀬原勝秀

は號一安齋大口権九郎子積號山孤弟子なり

大口子積は武器普録撰者なる遠藤保

武號得心斬弟子なり亦予か系傳は大口子積

より谷口喜内彦知號子哲に傳ふ谷口彦

知より大塚稔右衛門氏春號徐林に傳ふ大

塚氏春より予に傳与せり元來は谷

口彦知大塚氏春も予か同志にて大

口子積の弟子也谷口彦知高弟にして

獨免許状を得たり故に子積死後に

およひて大塚氏春は谷口彦知より免

許せり予は大塚氏春か免許たり且へ大

口子積弓術竹林派皆傳の弟子にて山孤

先生か骨腸とせる所は會傳せり然に
同し流傳の武器普録なるものなるに
此乳繩式掌と題する書傳來せず
伊藤覺貞は予か許に成て武器故
實藝古切磋勢んことを乞需疇に
早男乳繩のことを問予答て云乳繩と云
ものは習傳なとある程のことにはらず
た、乳通りに繩をあて其寸弓を取こと也
其外繩にとても皆然し其寸弓を鎧

師かねへ渡す而已にて何の子細あるに
あらずと云し覺貞又問乳繩式掌し
巻といふ出傳交せり此趣にて所見せ
るに容易のことにもあらず定て予か
家にも有なんいかがのことにやと云し素よ
り傳來せさる書なれば右等は出名たも
ふ及聞と答方其後彼乳繩式掌を
持参して乳繩のことを詰問せり予其
求に固て許しの愚稿を述たり勿

論予か管見文盲なることは人の知

たる所なり徒今當の画人等は己か家

職の本意を失ひし者問し少しならず

彼等に早男新調を亭する時其註文

乳繩のことなと委細明白にせつれは鎧工に

侮傲せられて其製作も粗畧に至り

名聞見物而已になりて實正を失ふこと

になんありするされは右著のことは不知

を當におゐて此註文乳繩のことは精く

ためてはふ叶のことなり能々考あるべし
何様其實物にあたり其人と對互し
訓得せし上ならては合點なるへからず
味ひ浅からす仍て爰に筆を正む
もの也

文化四丁卯年九月廿五日 大野又兵衛一貫述

此書者大野忠夫先生之雖爲藏書
恩顧之至免予令寫之豈可不秘乎

文化五戊辰歲晚春中浣

遠藤平作思忠

在判

此書は遠藤思忠先生雖爲秘
書予に被^せ為^れ傳か免しなれ今
写し豈可秘哉く

天保八酉年

正月日 井関儀右衛門祐方

乃

嘉永六丑年

初秋 佐藤庄藏信成

乃